

## 学習意欲を高める国語科書写の授業導入Ⅰ ～書写における導入のあり方と小学校国語科書写への展開～

A Study of the Introduction of 'SHOSHA'  
to Foster Motivation in Learning I.  
: The Proposal for the introduction of 'SHOSHA'  
and its Practice in Elementary School.

枝 正 千加代

Chikayo EDAMASA

本学大学院 美術教育専攻  
平成20年修了生, 府中東小学校

和 田 圭 壮

Keiso WADA

美術教育講座

(平成22年9月30日受理)

### はじめに

授業の構成において、「導入」の工夫は重要である。「導入」は、学習者を授業に引き込む動機付けであり、「導入」次第で学習者の授業への姿勢が左右される。そして、「導入」の工夫には、様々な事柄を考える必要がある。

まず、「導入」の工夫について考える際、児童の「学習意欲」に着目した。例えば、児童はどのような状態になれば、学習意欲が高められるのか。また、教師は児童の学習意欲を高めるためにどのような工夫ができるのか。このように、教師は児童の状態に応じ、学習意欲を高めるために適切な対応を求められる。

次に、授業の「導入」についての先行研究に着目したが、書写での「導入」に関する先行研究は非常に少ない。また、国語科に位置付けられている書写は、時間数も確保されにくいという現状がある。書写の授業を、より効果的・効率的に行うためには、まず児童の興味関心をわかせる授業を展開する必要がある、書写における「導入」の研究は大変意義がある。

本研究では、小学校国語科書写において、学習意欲を高める「導入」方法を明らかにしていく。

まず、「学習意欲」に着目し、「学習意欲」を高める工夫をまとめる。次に、教育学における「導

入」とは何かを整理する。そして、小学校国語科書写における「導入」の工夫に着目し、5年生の各単元の効果的な導入例を提案する。最後に、教育現場に還元するための書写における「導入」の要点を明らかにしていきたい。

### 1. 学習意欲を高めるとは

#### 1. 1 学習意欲について

##### 1. 1. 1 「動機」と「動機付け」

心理学において「意欲」とは、「学習の動機付け（モチベーション）」で、「学習意欲」とは、「児童が勉強の動機（欲求）を起し、学習（勉強）行動に駆り立てられること」を意味している。また、平易な言葉で表せば、「やる気」のことである。

「動機」と「動機付け」という用語においては、厳密には、この両者は異なる意味を持っている。アトキンソンは、「動機」を「比較的安定した傾性」、 「動機付け」を「動機を喚起した状態」と区別して用いている。つまり、「動機」は個人の有している欲求の傾性であって、必ずしも現実に行動に表されるものではない。これに対して、「動機付け」は行動に表されている状態を意味している。

まずは「動機」と「動機付け」の違いを詳しくしていくことから「学習意欲」がどのようなもの

であるか考察を進めてみることにしたい。

『授業改革事典』によると、「動機」は大まかに次のように分けられている。

①生理的動機（1次的動機）

—食欲・渇き・睡眠・休息・排泄・呼吸・性など生理的ホメオスタシスに基づいたもので個体の生命維持に不可欠なもの動機（性の欲求のみは個体の生命維持に直接関係しない）である。

②社会的動機（2次的動機）

—派生的動機，獲得的動機ともよばれ，個体が後天的に様々な経験を通して学習されたもので，マレーは，所有・優越・承認・支配・愛情など28種の動機をあげているが無数にあるといってもよい。この動機は，必ずしも個体の生命維持とは関係しない。また，先に述べた生理的動機はどの人間にも共通な普遍的なものであるのに対し，社会的動機は個々人によって経験や価値観が異なっているのであるから，それを有するかどうか個々人によって異なっているのである。

③内因性動機

—この動機は，生理的動機や社会的動機のように，外側に何らかの報酬があるのではなく，活動そのものの中に報酬の存在するものである。この動機の中には，活動性・好奇心・探索欲求などがあげられる。

これらのうち，学習の「動機付け」に関係する「動機」は何であろうか。学習の「動機」は複雑であって，単一の「動機」だけに規定されるものではない。

第一に考えられるのは，好奇心や興味などに裏付けられた知的側面に関係する内発的なもので，「内因性動機」である。次に，「人から認められた」「ほめられたい」「笑われたくない」など，外発的なもので，「社会的動機」である。もちろん，「生理的動機」も関係している。例えば，空腹の状態や疲労している状態では，学習の「動機付け」は生じにくい。

次に，現実態としての「動機付け」について，波多野誼余夫は『自己学習能力を育てる』で，以下のように定義している。

生活体の行動を引き起こし，その行動を一定の目標に方向付け，行動の終結に向かって維持，促進させる過程や機能のこと。行動の原因「やる気」。

「動機付け」とは，「動機」を喚起した状態であるため，行動に表される状態を示している。次に，学習への「動機付け」について，波多野誼余夫は次のように分類している。

○外発的動機付け

—学習とは内容的に関係ない外的な要因（例：報酬の獲得，叱責の回避）

○内発的動機付け

—学習活動自体が目的となっている状態（例：知的好奇心，操作動機，達成動機）

この分類から理解できることは，「外発的動機付け」とは，「生理的動機」と「社会的動機」に基づき，「内発的動機付け」とは，「内因性動機」に基づいていることが分かる。

学習への「動機付け」を，「外発的動機付け」に当てはめると，児童は，教師に「ほめられたい」「しかられたくない」といった「動機」によって，学習を始める。「ほめられる」「しかられない」といった目標に到達すると，その「動機」は満たされ学習行動が停止する。この学習への「動機付け」の報酬は，「ほめられる」「しかられない」ということであった。これは，先に述べたように外側に報酬がある。

この他にも，学習への「動機」のうち，「よい点をもらえば，親からほうびがもらえる」「友達に自慢できる」「入学試験に合格する」「いい会社に就職できる」「金持ちになれる」「尊敬される人になれる」などがあげられる。これらの報酬は，すべて自己の外側にあって，学習行動には直接関連しないものであるが，学習への一定の「動機」は果たしていることは確かである。しかし，目標が達成し報酬を得てしまえば，学習する行動は終了してしまう。

こうした立場を，波多野誼余夫は「なまけものの心理学」と呼んでいる。すなわち，人間の行動は自発的に生じるのではなく，何か外側に報酬がなければ生じない。したがって，「賞」や「罰」を与えながら，教育していく必要があると考えている。

これに対し，人間は本来活動的で，自発的・自主的に行動するものであるという人間観に立った考え方がある。これが，「内発的動機付け」に当

てはまる。この背景には、興味や好奇心という「内因性動機」がどんな人間にもあることを、マッギル大学のヘロンが感覚遮断実験したことから明らかとなった。ヘロンらは、大学生を被験者に、ベッドの上で食事とトイレ以外何もしないで横たわっているだけのアルバイトを募集した。視覚刺激も聴覚刺激も触覚刺激も制限されるものであったが、被験者は最初、喜んでこの楽なアルバイトに参加した。しかし、多くの被験者が刺激を求め、2～3日で根を上げた。

以上のことから、人間は本来けっして怠け者ではなく、常に刺激すなわち情報を求めていることが分かる。こういった「内発的動機」によって、学習が進められることにより、学習行動は自発的・自主的になると考える。この場合の報酬は、学習過程や学習の結果に対する喜びや満足感の中にある。

教育現場の中では、「外発的動機付け」による指導が依然として行われているが、最終的には自ら学びたいと感じる「内因性動機」に基づいた「動機付け」が好ましい。しかし、「外発的動機付け」が、有効的に働くこともある。例えば、児童は最初、教師や親からほめられたいため、あるいはしかられたいために勉強していく。しかし、学習を進めていくにつれて、勉強そのものに興味や関心が生じてきて、次第に自発的・自主的に勉強するようになっていく。また、「外発的動機付け」によって、学習習慣や態度といった行動の側面が強化されることもある。

### 1. 1. 2 自己効力感について

「動機」と「動機付け」において、内発的に生じることが望ましいことが理解できる。そのためには、「自分にはできる」というように、自らの能力について確信を持つことである。これが、「やる気」の向上にもつながっていく。学業であれ、音楽やスポーツであれ、何かを学ぶときに「自分にはできる」という自信を持つことはとても重要なことである。心理学では、このような感覚のことを「自己効力感 (self-efficacy)」と呼んでいる。学びを支える「やる気」について考えるためにも、「自己効力感」というものが、どのようなものか明らかにする必要がある。

バンデューラは、社会に生きる人間が周囲の環境との相互作用を通して行動を変容させていく過程を「社会認知理論」として提唱し、そのなかで「自己効力感」の重要性について指摘をしている。学業をはじめ、運動、人間関係、健康、カウンセ

リングや心理療法における問題など人間の行動の全般にわたって多くの研究が行われており、「自己効力感」が「動機付け」を向上し、行動に変化をもたらすことが確かめられている。

「できそうだ」という「自己効力感」を高めるには、どのようなサポートが必要であろうか。「自己効力感」には4つの情報源がある、この情報源を通じて「自己効力感」は高まったり低くなったりするものと考えられている。伊藤崇達によると、『やる気を育む心理学』において、以下のよう4つの情報源が述べられている。

#### ①遂行行動の達成

…実際にある行動をとってみて、できそうだという感覚を持つこと。成功を体験し、達成感を得ることが自己効力感を高めることになる。最も強力な情報源の1つである。

#### ②代理的体験

…他人が取り組む様子を観察し、自分もやれそうだという感覚を持つこと。自分ですぐに実行に移すことが難しい時、初めて体験する場合などに、他人の行動を観察することが有効となる。

#### ③言語的説得

…人からできると説得されたり、あるいは、自らを説得したりすること（自己暗示）で、自己効力感が高まる。情報源として強いものではないが、他の情報と併せて実施することで一定の効果が期待できる。

#### ④情動的喚起

…自らの情動の喚起状態が自己効力感のあり方を左右する。心臓の鼓動が速くなり緊張が高まれば、できないのではないかと感じるし、逆に、気持ちが落ち着いておれば、うまくやれそうだと自己効力感を高めることができる。

「自己効力感」の考え方は、うまくできそうだという一種の「期待」が高まることで「動機付け」も高まるものである。「期待」とは別に、「動機付け」を規定するもう1つの重要な心理的側面に「価値」がある。取り組もうとしている行為にどのような意味があるのか、どのような「価値」があるかということは、人により状況により異なるものである。その内容に「価値」を認めれば、取り組む意欲は高まるであろう。また、「価値」がないと思えば、たちまちやる気を失ってしまうことになる。「期待」と「価値」という2つの側面によって動機付けの問題を考えようとする理論は、総称して「期待×価値理論」と呼ばれている。



## 1. 2 学習意欲を高める工夫

### 1. 2. 1 学習意欲を喚起させる教材

「学習意欲を喚起する教材」とは、教材自体に興味・関心を抱くようなものである。『授業改革事典②授業の設計』で、興味を喚起する教材について、次のように述べられている。

興味は、すでに知っていることや、逆にそれが何であるかをまったく知らないような未知の対象には生じないのが普通である。すなわち、児童生徒がすでによく知っていることを繰り返し授業で学習させることは児童の知的興味を減退させる。逆に、まったく新しい内容を彼らの既有知識や経験と結びつけずに与えることも興味を喚起しないのである。既知と未知が適当に混合している時、または、既知と未知に不一致、葛藤があるとき、興味が喚起されるわけである。興味に基づく学習行動とは、いわば、未知と既知の不一致（不均等）を一致させる行動である。もちろん、例えば、計算のドリル練習もただ漫然とさせている限り、興味はわからない。ドリル練習によって計算能力が向上したことが児童生徒に示されれば、能力向上への欲求（コンピテンシ）が満足されることになる。ここでも、過去の自分の能力と新しい能力の不一致、あるいは、現在の能力と目標とする能力の不一致を認識できるから、興味が喚起されるのだと解釈される。

このように興味を喚起する教材の第1条件は、その教材が一方では子どもにとってなじみのあるものであると同時に、他方では未知の部分が残っているものでなければならない。既知と未知の混在しているところや、親近性や新奇性が適当に混ざっているところに興味は喚起されるのである。

学習意欲とは、「未知」と「既知」の中に存在するもので、どちらかに偏っていても学習意欲は喚起されにくいということである。確かに、簡単すぎる問題に向かうときは、簡単すぎて面白くなく、難しすぎる問題に向かうときは、難しすぎてやる気が湧かないものである。「頑張ればできそうだ」というようなものが最も児童の学習意欲を引き出すことができるのである。そこで教師は、こうしたことを意識して教材を選ぶことが必要だと理解できる。

そのために教師がまずやらなければならないことは、当然のことであるが、児童の状況をよく把握しておくことである。児童が一般的にどのよう

なことに興味を持っているのか、今までにどのようなことを学んできたのか、該当学習と関連することでの既習事項は何か、などをできるだけ具体的に詳しく調べておくことが必要である。

例えば、野球やサッカーに興味を持っている児童は打率やシュート率を結びつけて、比・比率・パーセント・割合などの学習を導入すれば、学習意欲は高まるであろう。

また、既習事項や既有知識を知ることは、児童のレディネスの状態を知るためにも必要であるが、同時に「未知」と「既知」の混在する教材提示のためにも必要である。このような教材提示は、先に見たように学習意欲の喚起の第一条件ともいえるので、児童が何をどのように理解しているかを知らねばならない。そのためには、レディネス・テストや主題の事前テストをする必要も出てくる場合もあれば、日常の指導で子ども一人ひとりの実態を具体的に捉えておくことも大切である。

### 1. 2. 2 学習指導過程の視点

次に、「学習指導過程の視点」から、導入時についてどのようにとらえて工夫することができるのかを考える。

授業導入の際、学習目標や学習内容を明確化することは、授業を組み立てる上で大切な条件の一つであるが、学習意欲を喚起するためにも必要かつ重要な条件である。つまり、ここで言えることは、導入時に「目標の明確化」を工夫する必要があるということである。授業における学習目標は、実に様々な用語で記述されている。「～について知識を得る」「～について理解を深める」「～の態度を養う」「～に感動する」等である。

教師は、これらの目標が導入時に明確化されるよう工夫しなければならない。

目標が明確化されるということは、児童たちにとって目標を達成しようとする気持ち（達成動機＝やる気）を引き起こすことにもつながる。その目標が達成できれば、自分の能力が向上したことを素直に喜ぶことができる（能力向上の欲求が満足する）。もし、目標が不明確であれば、達成動機も生まれにくく、能力が向上したか否かも不明になる。

「目標の明確化」のほかに、「既習学習との関連付け」を工夫することも考えられる。授業で獲得される知識や概念や能力は、単独にあるのではなく、それまでに学習された内容と深く関連付けられなければならない。

既習学習との関連を受けて、学習意欲に基づく

学習とは、受身的ではなく、積極的・能動的な活動である。したがって、授業の導入期において単なる知識の受け手として児童を見るのではなく、積極的な知識への探究者と見なすことが重要である。

## 2. 授業における「導入」

### 2. 1 「導入」について

「導入」は、本時の授業のめあてを提示するまでに行うもので、児童を授業に引き込む魔法のような役目を持っていると考える。実際に授業を行うにしても一番悩むのが「導入」と言っても過言ではない。それほど、「導入」には本時の展開に発展させていく中でも、重要な役割を占めている。ここで、教育学上において「導入」はどのように捉えられているのであろうか。様々な文献から「導入」について明らかにしていく。

吉本均の『授業の演出と指導案作り』によると、

「導入とは、子どもたちの身にかかり、彼らの知的好奇心をゆさぶり、誘発するものでなくてはならない。」

とある。

飯島幸久の「保健体育科 児童の学習意欲を高める授業導入の工夫」によると、

「導入とは、学習に対する構えをつくって、学習の準備をする段階であり、学習活動を支える基礎的条件を整えること、および学習者の学習意欲を喚起することが基本的に重要とされている。」

とある。

また、『国語指導法事典』によると、「導入」は次のように述べられている。

1. 単元学習をする時、学習者を学習に導き入れること。
2. 一般的に「動機づけ」と同じ意味に使う人が多い。
3. 厳密な意味では、「動機づけ」と区別した方がよい。「動機づけ」というのは、「好奇心・興味・関心・意欲などを持たせて、学習しようという気を起こさせること」であり、「導入」というのは、「動機づけ」がなされてから、「さて、これから学習作業の順序を見通し、その計画を立てること」である。
4. 単元学習の段階としては、導入・展開・終

末という大まかな3つの段階をとることが一般に行なわれているが、「動機づけ」は、この導入段階に含まれているのが普通のものである。＜一部省略＞

『国語指導法事典』では、「導入」と「動機づけ」の関連性について述べられている。「動機づけ」とは、学習心理学の用語であり、「意欲＝やる気」に当たる。

「導入」は、学習者の学習意欲を高める最初の段階であるため、学習者の心理的な要素が含まれるものであるため、「導入」と「動機づけ」を同じ意味で捉える考えがある。

また、「導入」と「動機づけ」を区別した方がよいという考えもある。区別する場合の「導入」は、「導入」の中に「動機づけ」が含まれていると述べられている。

### 2. 2 現代における「導入」の意義

近年の授業傾向として、授業開始と同時に授業に集中することができない児童が増えてきているといった話を聞く。どのように集中することができないのか、上條晴夫が提案した授業観察の方法から考えていく。上條晴夫は、5分ごとに教室の「緊張度」「飽和度」「自発度」を5段階評価する観察法を挙げている。これは、心理学の評定尺度法だといわれる。上條晴夫の恩師である青年心理学者の西平直樹は、この3つの観点を直感的に5段階で評価し、時間系列で観察することが重要だといわれている。

「緊張度」は学習者が教師の方を向いて、話を聞く姿勢が出来ている状態の度合いである。「飽和度」は、集中力に欠け、ざわついた様子を表す度合いである。「自発度」は、それぞれが真剣に取り組んでいる様子を表す度合いである。一般的に授業における「導入」段階では、学習者の「緊張度」は高い。なぜなら、始業挨拶直後において、学習者は本時の学習がどのように始まっていくのか関心を持ち、様子を伺っているからである。しかし、近年、この「導入」の「緊張度」が低くなっているといえる。

その原因として、授業中での学ぶ意欲の低下、休憩時間から授業時間に入るときの切り替えの遅さ、学習への態度が集団生活の中で育まれていないことなどが考えられる。つまり、本来「緊張度」の高いはずの「導入」は、気持ちに引き締まりのない「飽和度」から始まっていると言うことができる。このような状態で授業を進行すると、授業

の展開時にも集中できない要因につながるともいえる。

ここで言えることは、「導入」のあり方によって、学びの姿勢が出来たり、学習目標の達成につながることである。つまり、児童を学習の達成に導くために、教師側は児童の興味関心を湧かせることの出来る「導入」を行うことが重要であることが言える。もちろん、児童自身の学ぶ意欲を上昇させることも大切なことであるが、児童一人ひとりの意欲を高めることを考えると、個別のケアが必要になってくる。授業と言うものは、教師—児童がいて初めて成り立つものである。授業の流れを考えている教師にも出来る工夫はたくさんあるものである。それを追求していくことは、教師の授業力や指導力の向上にもつながり、児童の学習意欲を高め、最終的に児童の学力の向上にも関係してくると言っても過言ではない。そのために教師は常に児童の立場に立った授業研究をする必要がある。

つまり、授業を進める立場としての教師の姿勢と、学習者の学ぶ意欲の度合いが「導入」の「緊張度」に関係している。それは、教師の教材研究の度合いや、児童に身につけさせたい目標を達成させるための方法・手段の吟味、授業に対する情熱等によって教師の思いが児童に伝わり、学習に導くことが出来るからである。

実践的には、「導入」段階の指導も多様である。一例として、戦後、村上芳夫らによって提唱された「主体的学習」があげられる。『現代授業研究大辞典』では、「主体的学習」方式を以下のように紹介している。

「主体的学習」方式によれば、従来の「導入・展開・整理」授業での導入指導は、予習や復習をしていない生徒子どもがいることを前提にして、教師中心の発問—応答という方式が、学習の自主性・自発性を乏しくしているとす。このような、つねに教師から動機付けられ、学習課題を与えられる導入指導を克服するために「主体的学習」では、前時の終わりに導入を行い、学習課題を与えて、家庭学習をもとに授業は「展開」から始める。(村上芳夫, 1982)

村上芳夫は、家庭学習を前提とし、授業は展開から始めることを提案している。この方式は、「導入・展開・整理(終末)」という型にはまらない授業展開であり新鮮に感じられるが、家庭学習を主においている点に疑問を感じる。家庭の学習

力は、個々の家庭に応じて異なるものであり、必ずしも平等な条件で授業展開に入れるわけではない。つまり、授業終末の「導入」から、次の授業開始時の「展開」までに個人差が生じると考える。また、「導入」から「展開」までに空白の時間があり、意欲が途切れる恐れもある。

これに対し、『現代授業研究大辞典』の著者・湯浅恭正は以下のように意見を述べている。

導入が学習意欲や課題意識を高め、学習への準備を図る段階だからということで、教師からの働きかけを極力ひかえて、子どもに学習課題を発見させ、学習を進めるという発想は、今日なお多く見うけられる。学習動機とは、導入での教師の指導力を弱め、後退させれば、自発的に引き出されてくるものではない。(湯浅恭正, 1987, P.486)

このように、教師からの働きかけが重要であることが分かる。本来、学習意欲や課題意識というのは児童自身が発見していくことが望ましい。しかし、教師の働きかけなしに、児童が教師の掲げる学習目標の達成に自発的に向かう児童は少ない。大切なことは、児童自身が学習課題を発見するために、教師が様々な工夫や準備を凝らすことである。そして、導入段階で児童の学習意欲や課題意識を引きつけ、学ぶ姿勢を作ることである。

次に『現代授業研究大辞典』で述べられている、吉本均の「導入」論を紹介する。

吉本均は、「導入」論も、授業過程での最初の「段階」ではなく、導入における「指導」の役割、教授学的機能を問うところでなければならない、として「導入の教授学」を提唱している。つまり、導入においては、「ヤマ場」と違って、教科内容の習得にむかっの能動的な思考・表現活動を刺激するために、教授行為がどんな機能を果たさねばならないかについての実践的検討が今日、求められている。それは、「段階」論と違って、導入の教授「機能」を浮き彫りにすることで、指導の重点がいっそう明確にされるからである。

吉本均は、導入にも「段階」論とは異なる教授「機能」があること、それを浮き彫りにすることに重点を置くことを述べている。確かに、「導入」とは、「展開」へと引き込むものであれば、「段階」論として重要な役割を持っているが、「導入」自体に意義を見出せば、立派な教授「機能」を果たすことになる。



ここでは、様々な教育学者の意見を基に、「導入」の意義について述べたが、「導入」とは、いわば授業開始から授業展開につながる重要な役割をもっている。児童自身の学習に対する姿勢はもちろん大切であるが。教師側も様々な工夫を凝らすことで、児童を学習目標の達成へ導くことが出来る。そのことを念頭において、「導入」にはどのような学習支援方法があるのかについて考えていく必要がある。

## 2. 3 「導入」の目的・条件

### 2. 3. 1 「導入」の目的

「導入」とは、単に「新しい教材」へと子どもを誘い込むものではなく、授業展開へ児童を「動機づけ」「学習内容へと導いていく」目的を持っている。『教室の空気を変える！授業導入100のアイデア』には、「導入」において、以下の3つの要素を意識する必要があると述べられている。

- ①「前ぶれ」…授業の展開部の内容を予告する
- ②「さらい」…前時の復習をして本時につなぐ
- ③「つかみ」…学習者の心をつかむ

①「前ぶれ」は、授業の流れの中で、導入から展開につながぐときに必要な行為である。本時ではこのような学習をしていくということを、児童に理解させた上で授業内容に入っていく必要があるからである。

②「さらい」とは、前時の復習を表している。特に授業は1つの単元が数時間で構成されており、1時間で学習できることは限られている。時間割があり、1つの教科だけを集中的に学習することはほとんどない。そのために、途切れた空間を導入時にサッと埋め合わせる必要がある。

③「つかみ」とは、学習者の意識を導入時で授業に向かわせることである。これが教師にとって最も難しく大切なものである。

### 2. 3. 2 「導入」の条件

これらの目的を達成させるためには、教師は「よい導入」を行うことを意識しなければならない。しかし、「よい導入」にも条件がある。小島稔の『道徳指導の技術＜上＞導入と展開』より、「良い導入」の条件を以下のように整理する。

- ①発達段階に即応していること
- ②生徒一人ひとりの実態が捉えられていること
- ③日常の生活事実を導入に持ち込むこと

- ④学習する雰囲気がつくられていること
- ⑤生徒の学習意欲が高められていること
- ⑥生徒が学習活動をつかんでいること
- ⑦教師の指導態勢が明確にされていること

これらの全てが必要というわけではないが、これらの条件を加味することで、良い「導入」を展開していくことができると考える。

## 3. 国語科書写における「導入」の工夫

これまで、「学習意欲」や「導入」について述べてきたが、これらを書写の授業において、どのように生かしていくかを考える必要がある。

学習意欲が喚起できるかどうかは、学習目標における達成度が大きく関わってくる。これは、学習意欲が高まることで、授業の学習目標を達成できるということにつながる。このことに配慮し、書写の授業ではできるだけ本時の学習目標と自分の課題が重なるようにする。そのためにも、導入時から工夫をする必要がある。

一般的には、教科書教材等を使用して、学習目標を示すことになるが、その方法は児童にとって学習に対する意欲を喚起しにくいことがある。

その問題を解決する方法として、児童の身近なもの（生活ノートや漢字練習ノートなど）を取り上げ、課題を見つけていく方法がある。

また、学習目標の達成度が不十分な文字例やそれに類するものを提示し、それと主教材を比較することによって、児童に「そうか！そこを直せばよいのかな？」または、「そうか！それなら自分にもできそうかな？」と思わせる。この方法は、児童が主体的に課題を認識し始めていると考えられるため、「導入」の段階で学習意欲を相当喚起できたことになるのである。

『わかりやすい書写の授業—内容と展開と評価—』の中では、書写における「導入」の工夫として、以下のような方法が紹介されている。

### ○方法1

日常の文字を取り上げる。

#### ●予想される児童の反応

自分の文字を、比較的、客観的に見ることによって、意欲を高めさせる。

友人の字と、自分の字を比較することで、自分のくせに気づき、目標を明確にすることができる。

<p>○方法 2</p> <p>前時の作品を提示する。</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>前時の反省をし、更に進歩しようという気持ちを起こさせる。</p> <p>前時の学習を想起し、本時のめあてを理解する。</p>
<p>○方法 3</p> <p>意図的に良くないものを提示し、意見を言わせる。</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>得意になって間違いを指摘する。意欲の少ない児童に発言させて、意欲を持たせる。</p> <p>全員に挙手させ、共通理解を図る。</p>
<p>○方法 4</p> <p>一瞬見せて、すぐ隠し気が付いたことを言わせる。</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>何回か繰り返すと、真剣に見る態度ができ、集中力が増す。</p> <p>ゲーム感覚の要素があり、発表意欲が増す。</p>
<p>○方法 5</p> <p>分解文字の組立てをさせる</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>あれ、これ動かしながら意見を言うことができる。</p> <p>正しい字形の共通理解を図ることができる。</p>
<p>○方法 6</p> <p>教科書文字を、ねらいをもって見させる。</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>漠然と見ないで、何を学ぶのか考えさせることで、考える力が付く。</p> <p>発見する楽しさがある。</p>
<p>○方法 7</p> <p>試し書きをさせる。</p> <p>●予想される児童の反応</p> <p>自分の課題を見つけるために大変効果的である。</p> <p>目標を明確に持つことができる。</p>

具体的な方法は大きく分けると教師が意図的に用意するものと、児童が書いたもの（試書等）を利用する2つである。

これらは、国語科書写における一般的な方法であるが、この方法がいつも児童に適しているかと考えると、必ずしもそうではなく、あてはまらないときもある。やはり、学習を意欲的に行わせる

ためには、児童の実態に応じて「導入」の方法を工夫することが必要である。

そこで、一般的な方法に加え、他にどのような「導入」が考えられるのかいくつかの例をあげ、指導者として、これらを手がかりとして、更に「導入」に工夫を凝らし、より効果的に展開していくことを試みたい。

国語科書写における「導入」の工夫を提案するにあたり、東京書籍が出版している『新しい書写 5年生』の学習指導書に挙げられる「導入」例を考える。その際、先ほど挙げた書写における「導入」の方法（例）や、第1章、第2章で触れてきたよい「導入」の条件、または工夫を取り入れながら、他にどのような「導入」が考えられるか、単元別に検討する。

#### 単元1：毛筆のしせい

##### 【単元目標】

- ・毛筆の姿勢・筆の持ち方を確認する。
- ・学習の進め方を理解する。
- ・既習の筆使いについて確認する。

##### 【授業導入（例）】

- (1) 正しい姿勢をするよう声をかけ、正しい姿勢の児童をほめる。
- (2) 正しい姿勢の写真を掲示し、真似をさせ、児童同士で相互評価させる。
- (3) 正しい姿勢の合い言葉を決める。
- (4) ビデオ撮影をし、集中力を高めさせる。
- (5) 学習の進め方を視覚的に示す。
- (6) 基本点画プリントを使用し、既習の筆使いについて確認させる。

##### (1) について

「正しい姿勢をするよう声をかけ、正しい姿勢の児童をほめる。」とは、第1章で述べた「外発的動機付け」に関わり、児童の「ほめられたい」という気持ちを持たせる方法である。児童は、他の誰かがほめられると、自分もほめられたいという心理から、自然と教師の目線を意識する傾向がある。そこで、姿勢がよくなった児童をほめると、ほめられたうれしさから、学習意欲の向上につながる。ほめ方について、一人をほめると、何人も意識し始めるため、グループごとにほめたり、列ごとにほめるなど、一度に多数ほめる方法もある。

##### (2) について

「正しい姿勢の写真を掲示し、真似をさせ、児童同士で相互評価させる。」とは、他者との関わりを通して、第1章で述べた「自己効力感」を高



める方法である。他人が取り組む様子を観察し、自分もやれそうだという感覚を持ち、互いに評価し合うことで、学習意欲の向上を目指している。また、児童同士のペア学習という形態は、児童自らの学ぶ意欲（「内因性動機」）を向上させるのに、大変有効である。

(3) について

「正しい姿勢の合い言葉を決める。」を決めると、その合い言葉で、常に正しい姿勢を意識することができる。例えば、筆が寝ている状態で書く児童がいるが、筆をたてることを、「10円玉が落ちないように筆を持とうね。」と確認しておく、**「10円玉」**という合い言葉で、自然と児童の筆が立つようになる。また、脇をしめて字を書く児童には、肘をあげさせるために、**「脇にドッジボールが入るようにしてごらん。」**そうすると、肘がよく動いて、筆が動かしやすいよ。」と話をしておく。すると、**「ドッジボール」**という合い言葉で、自然と児童の肘があがり、正しい姿勢を作ることができる。児童にとってなじみのある言葉は、第1章で述べた学習意欲を喚起させることにつながり、有効な合い言葉になるだろう。

(4) について

「ビデオ撮影をし、集中力を高めさせる。」とは、これも「外発的動機付け」であるが、「見られている。」といった意識が、意欲に変わり集中力を高めることにつながる。しかし、ビデオ撮影は一時的なものにすぎないため、授業後にビデオ上映するなどして、振り返り活動を行うことが有効である。

(5) について

「学習の進め方を視覚的に示す。」とは、第2章で述べた、よい「導入」の条件に関係するところである。教師の指導態勢が明確にされることで、児童は、見通しを持って学習に望むことができる。これは、どの学年、どの教科であっても有効な方法で、よく理科の学習では「予想→仮説→実験→結果→考察」といった学習の流れを教室に貼り、学習の進め方を示す場合がある。しかし、必ずしも毎回同じ流れということはないため、導入としては、基本パターンを示すとよいだろう。

(6) について

「基本点画プリントを使用し、既習の筆使いについて確認させる。」とは、これまで学習してきた基本点画（横画・縦画・左はらい・右はらい・はね・折れ・点・まがりなど）を一枚の半紙にまとめ、印刷したものを配布し、なぞって練習する方法である。これは、第1章で述べた「既習事項と

の関連付け」をはかった「導入」方法で、どれだけ技能を習得できているか確認することができる。書写の苦手な児童にとっては、これをするすることで、より苦手意識が高まってしまうかもしれないが、「苦手を発見して、できるようになるうね。」と教師側の適切な言葉がけで対応することができる。

単元2 組み立て方（上下の部分）「笛」

【単元目標】（毛筆）

- ・「笛」の上下の組み立て方を理解する。
- ・「たけかんむり」の書き方を理解する。
- ・既習事項にも注意して、「笛」を整えて書く。

（硬筆）

- ・硬筆で、上下の組み立て方に注意して書く。
- ・自分の課題を選択し、上下・左右の組み立て方を考えて書く。

【授業導入（例）】

- (1) 毛筆で書かれた「笛」のよい例と悪い例を示し、比較させる。
- (2) 「竹」が「たけかんむり」になると、高さや形がどのように変化しているか発見させる。
- (3) 試し書きをさせる。
- (4) ノートの文字をとりあげ、上下の組み立て方が関係する文字を理解させる。

(1) について

「毛筆で書かれた「笛」のよい例と悪い例を示し、比較させる。」とは、「たけかんむり」と「由」のバランスがよい例と悪い例（「たけかんむり」が大きすぎたり、「由」が大きすぎたりする例）の3通りを示し、比較させ、よい例を発見させる導入方法である。このときに理由もあわせて発表させると、これまで硬筆で学習してきた内容を思い出しながら、理由付けすることができる。まさに、「既習事項との関連付け」をさせながら、意欲付けすることができる方法である。書写においては、この比較しながら整った文字を発見していく導入は、視覚的に分かりやすいため、どの学年でも活動することができるだろう。

(2) について

「「竹」が「たけかんむり」になると、高さや形がどのように変化しているか発見させる。」とは、一つの漢字が部首になることで変化する箇所を発見させることである。例えば、「竹」が「たけかんむり」になると、3画目が短くなり、6画目の縦画からのはねは、短い左払いに変化している。「あめかんむり」や「くさかんむり」も例に挙げることができるが、場合によっては、「きへ

ん」の4画目の変化など、児童にとって容易に変化が分かる例を取りあげてもよい。この「導入」は、児童の「知的好奇心」をゆさぶり、文字そのものに興味をもって取り組める良さがある。これは、第1章で述べた「内発的動機付け」の1つである。

(3) について

〔試し書きをさせる。〕とは、教科書の規準文字を見ずに、今持っている自分の力で試しに書く「導入」である。はじめに書く文字ほどよく集中して書けている。その後、規準文字を見て本時の課題を見つけていく。まさに、「目標の明確化」を図るのに最も適した「導入」である。しかし、ここでは何も見ずに書くため、思うように書けない難しさがある。書けないからおもしろくないと感じる児童がいてもおかしくない。そこで、「最初は上手に書けなくて当たり前。できなかったところを見つけたことがすごいよ。この時間うまくいかなかったところをがんばって練習すると、できるようになるよ。」と、児童の実態に応じた言葉かけをすることで、学習意欲をよりいっそう高めることを意識して行いたい「導入」である。

(4) について

〔ノートの文字をとりあげ、上下の組み立て方が関係する文字を理解させる。〕とは、第2章の国語科書写における「導入」の工夫で述べた、児童にとって身近な硬筆から入る「導入」である。宿題で使用している漢字練習ノートなどを活用し、児童の文字からよい例や悪い例を取りあげ、上下の組み立て方で大切なポイントを見つけさせたい。このとき、児童の文字を使うため、取りあげられた文字の児童の名前があがらないように配慮したい。硬筆と関連づけることで、硬毛の一体化を図ることができる。

### 単元3 筆順と字形「馬車」

【単元目標】（毛筆）

- ・「馬」「車」の筆順と画の間隔を理解する。
- ・既習事項にも注意して、「馬車」を整えて書く。

（硬筆）

- ・硬筆で、画の間隔に注意して書く。
- ・筆順の違いを理解し、筆順に従って書く。
- ・間違えやすい筆順に注意して書く。

【授業導入（例）】

- (1) 筆順を穴抜きにして、クイズ形式で考えさせる。

- (2) 筆順を間違えて書くとどうなるか説明をする。
- (3) 「馬」と「車」横画の間隔のバランスがよい例と悪い例を示し、比較させる。
- (4) 試し書きをさせる。
- (5) 硬筆の文字を取りあげて、字形の大切さについて考えさせる。
- (6) 「馬」と「車」の象形文字を示し、文字自体に興味をわくようにする。

(1) について

〔筆順を穴抜きにして、クイズ形式で考える。〕とは、「馬車」の各画に筆順の番号をつけ、特に間違いやすい「馬」の1～3画や「車」の6、7画目を穴抜きにして考えさせる方法である。クイズ形式のため、児童はゲーム感覚で楽しむことができる。また、「既習事項との関連付け」を思い出しながら考えることができるため、筆順についておさえないこの単元では、有効な「導入」である。

(2) について

〔筆順を間違えて書くとどうなるか説明をする。〕とは、筆順の重要性を示すことである。筆順を守るとは、文字を整えて書くための方法である。筆順を間違えると、字形が崩れ、特に速書きしたときに他者から認識されにくくなるおそれがある。当たり前のように守ってきた筆順の大切さを知るとは児童の知的好奇心をゆさぶり、「内発的動機付け」をすることにもつながる。いきなり説明から入っても、雰囲気が堅くなるので、はじめに筆順の間違った「馬車」を書いて、筆順に関心を持たせることがよいだろう。

(3) について

〔「馬」と「車」の横画の間隔のバランスがよい例と悪い例を示し、比較させる。〕とは、横画の間隔が同じになっているものと、極端に広がっていたり、狭くなっていたりするものを示し、どの間隔がよいのか比較させることである。ここでは、横画が何本もある場合、同じ間隔で書くと、文字が整って見えることに気づかせたい。児童の実態としては、毛筆で書いた場合、最初の方に力が入り、太く広くなりがちだが、この導入を行うことで、一文字の見通しを持ち、「目標の明確化」を図ることができる。

(4) について

〔試し書きをさせる。〕であるが、先程の単元と同じで、児童にとって第1章で述べた「目標の明確化」を図ることができる。ここでは、横画の

間隔と筆順がポイントになるため、試し書き後、しっかり本時の課題を見つけることが大切である。

(5) について

〔硬筆の文字を取りあげて、字形の大切さについて考えさせる。〕とは、児童にとってなじみのあるものを取りあげることである。そして、「未知」と「既知」を混在することができる。例えば、漢字練習のノートを用いて、横画の間隔をバランスよく書けているものと、そうでないものを示し、字形の大切さに気づかせたい。

(6) について

〔「馬」と「車」の象形文字を示し、文字自体に興味をわくようにする。〕とは、「馬車」の象形文字を黒板に書き、「昔の字なんだけど、なんて書いてあるかわかるかな？」と考えさせる方法である。絵のような文字に児童の「知的好奇心」をゆさぶり、「内発的動機付け」をすることができるだろう。様々な意見が出揃ったところで、答えを言うと、「馬車」がとても印象深く聞こえる。文字自体に興味を持ち、課題の提示につなげていくとよい。

単元4 筆使いと字形（ひらがな）「すばる」

【単元目標】（毛筆）

- ・平仮名の「結び」「折れ」「折り返し」の筆使いを理解する。
- ・「す」「ば」「る」の外形を理解する。
- ・既習事項にも注意して、「すばる」を整えて書く。

（硬筆）

- ・硬筆で「結び」の形に注意して書く。

【授業導入（例）】

- (1) 難しい所（ここでは「結び」を例に挙げる。）を見つけさせ、ポイントを考えさせる。
- (2) 「すばる」の意味について考えさせる。
- (3) 「外形」がどれに当てはまるか考えさせる。
- (4) 試し書きをさせる。
- (5) 硬筆で試し書きをさせる。

(1) について

〔難しい所（ここでは「結び」を例に挙げる。）を見つけさせ、ポイントを考えさせる。〕とは、「これまで、漢字を毛筆で書いてきて、これから平仮名を書くのに、難しそうと思う箇所をあげてごらん。」と問いかけ、今日の課題を予想させることである。おそらく、「結び」は出てくるだろう。もし、すぐに「結び」があがらなくても、何人かに意見を言わせ、「結び」のポイントにつな

げていくとよい。そして、「結び」という言葉があがったら、「す」「む」「は」「ほ」「ま」「よ」、「な」「ね」、「る」、「ぬ」「め」「お」「み」など、「結び」が入っている平仮名の例を挙げ、種類を分類分けする。すると、「結び」は1種類ではなく、何通りかあって、「すばる」を書く際に、それぞれの「結び」で気をつけて書こうという意識が高まる。この際、どこで、どのように筆が動くのか、水黒板でもOHCでもよいので、範書をするといふ。この「導入」は、第1章で述べた「未知」と「既知」が混在し、学習意欲を高めることができる。

(2) について

〔「すばる」の意味について考えさせる。〕とは、「すばるの意味を知ってる？」と問いかけることである。意外と「すばる」を知らない児童が多い。国語辞典によると、

おうし座の中にあるプレアデス星団の和名。  
肉眼では六つの星が見える。六連星。

と書かれている。または、「すばる」の漢字「昴」を黒板に書いて、何て読むか考えさせてから意味につなげてよいだろう。ここでは、しっかりと児童の知的好奇心を高め、「内発的動機付け」をして授業に入っていきたい。

(3) について

〔「外形」がどれに当てはまるか考えさせる。〕とは、画用紙で、△□▽などの形を用意し、「す」「ば」「る」の「外形」が、どの形に近いと考えさせる方法である。おそらく、「す」は▽、「ば」は□、「る」は△とすぐに答えが出るだろう。そして、整った字形で書くためには、「外形」を意識することがとても大切であることを確認することができる。ねらいをもって文字を見させることは、第2章の書写における「導入」の工夫、方法6に関連している。視覚的なもので児童の心をしっかりとつかめるように工夫したい。

(4) について

〔試し書きをさせる。〕では、児童にとって第1章で述べた「目標の明確化」を図ることができる。ここでは、「結び」の筆使いと字形（外形）がポイントになるため、試し書き後、ポイントをはずさないように、本時の課題を見つけさせたい。

(5) について

〔硬筆で試し書きをさせる。〕とは、いきなり毛筆で書いては難しいため、児童にとって身近な硬筆で、どれだけ「結び」を意識して書いているか見る方法である。低学年で学習した平仮名の復



習にもなるため、「既習事項との関連付け」を図ることができる。もし、硬筆でも「結び」や「外形」を意識していなければ、毛筆でも同じところができないだろう。または、硬筆では整えて書けても、毛筆になると書けないという児童も少なくない。このような活動から、本時の課題を持たせ、「目標の明確化」を図りたい。

#### 単元5「漢字とかなの大きさ〈花さく町〉」

##### 【単元目標】（毛筆）

- ・仮名は漢字より小さめに書いてつり合いをとることを理解する。
- ・「花さく町」の行の中心を理解する。
- ・字配り・配列について理解する。
- ・既習事項にも注意して、「花さく町」を整えていく。

##### （硬筆）

- ・硬筆で、漢字と仮名の大きさ、行の中心に注意を書く。

##### 【授業導入（例）】

- (1) 漢字とかなが同じ大きさに書かれているものと、漢字が大きく、かなが小さく書かれているものを提示し、比較させる。
- (2) 「花さく町」の中心を考えさせる。
- (3) 「花」「さ」「く」「町」を型どった画用紙を使用して、紙面（黒板）にバランスよく置き、字配りや配列を意識させる。
- (4) 試し書きをさせる。
- (5) ノートの文字を取りあげる。

##### (1) について

「漢字と仮名が同じ大きさに書かれているものと、漢字が大きく、仮名が小さく書かれているものを提示し、比較させる。」とは、比較発見による意欲付けである。第2章の方法3と関連している。ここでは、漢字は仮名よりも大きく書くほうがバランスがよいことに気づかせる。文字を見るとき的美的感覚を磨かせたい。

##### (2) について

「「花さく町」の中心を考えさせる。」とは、中心線がそれぞれの文字のどこを通過しているのか考えさせることである。規準文字を配布し、線をひかせてもよい。黒板やOHCなど、一斉に確認できるような方法をとってもよい。漢字と仮名をバランスよく書くためには中心が文字のどこを通過の知ることポイントになることを知らせたい。これは第2章の方法6と関連している。

##### (3) について

「「花」「さ」「く」「町」を型どった画用紙を使用して、紙面（黒板もしくは紙の上）にバランスよく置き、字配りや配列を意識させる。」とは、各文字につき大小二種類の大きさの画用紙を用意し、どの大きさの文字で書くとバランスがよいか考えさせる方法である。予想してあてはめる方法になるため、比較発見する方法よりも、少し難易度が高い。しかし、「未知」と「既知」が混在し、意欲を高めることができるだろう。型取った画用紙を人数分用意するのが大変であれば、グループの数だけ用意して、グループ対抗で考えさせても、楽しいだろう。ここで考えさせたいことは、漢字は大きく、仮名は小さく書くとバランスがよいということである。意識を高めて、「目標の明確化」を図る方法である。

##### (4) について

「試し書きをさせる。」では、児童にとって第1章で述べた「目標の明確化」を図ることができる。ここでは、漢字と仮名の大きさや字配り・配列がポイントになるため、試し書き後、規準文字との比較を通して、本時の課題を見つけさせたい。

##### (5) について

「ノートの文字を取りあげる。」とは、児童にとって身近な硬筆文字で、よい例と悪い例を考える方法である。第2章の方法1，方法6に関連している。よい例では児童の文字を例に挙げ、悪い例は教師が作るなど工夫もできる。おそらく、自然と漢字が仮名よりも大きく書いている児童がいる。その児童をしっかりほめることで、漢字と仮名の大きさのバランスを考えることの大切さを理解させたい。

#### 単元6 組み立て方（にょう）「進め」

##### 【単元目標】（毛筆）

- ・「にょう」の組み立て方を理解する。
- ・「しんにょう」の書き方を理解する。
- ・既習事項にも注意して、「進め」を整えて書く。

##### （硬筆）

- ・硬筆で、「にょう」「たれ」「かまえ」の組み立て方に注意して書く。

##### 【授業導入（例）】

- (1) 分解文字を組み立て、「しんにょう」の組み立て方を考えさせる。
- (2) 分解文字を組み立て、「佳」と「にょう」のバランスを考えさせる。

- (3) 「にょう」の種類をあげ、知っている漢字をあげさせる。
- (4) 試し書きをさせる。
- (5) 硬筆で試し書きをさせる。

(1) について

〔分解文字を組み立て、「しんにょう」の組み立て方を考えさせる。〕とは、第2章の方法5と関連している。画用紙で「しんにょう」の一画一画を型どったものを組み合わせて、「しんにょう」の組み立て方やバランスについて考える方法である。このとき、漢字ドリルや国語辞典などを用いて、「しんにょう」の形を確認し、正しい字形について考えるきっかけを作る。

(2) について

〔分解文字を組み立て、「佳」と「しんにょう」のバランスを考えさせる。〕とは、(1)と同じく、第2章の方法5と関連している。「佳」と「しんにょう」を別々に用意し、組み合わせて、どのあたりに配置するのがバランスがよいか考えさせる方法である。「佳」や「しんにょう」そのものをバランスよく書いても、「進」になるとバランスが崩れる児童がいる場合に有効である。

(3) について

〔にょうの種類をあげ、知っている漢字をあげさせる。〕とは、「しんにょう」以外にも「にょう」という部首があることを知り、知識を広げること、児童の知的好奇心をゆさぶり、「内発的動機付け」をする方法である。例えば、「しんにょう」なら、「辺」「返」「述」「送」「退」「追」「逃」「迷」「通」「造」「速」「運」「過」「遊」「遠」「達」「遅」「適」などあげられるだろう。「えんにょう」なら、「建」「延」。「そうにょう」なら「起」「超」などがあげられる。「進め」を練習することで、他の字も整えて書くことができると声かけすれば、より効果的である。

(4) について

〔試し書きをさせる。〕とは、第1章で述べた「目標の明確化」を図ることができる。ここでは、「にょう」の組み立て方、「しんにょう」の書き方について学ぶため、試し書き後、規準文字としっかり比較し、本時の課題を見つけさせたい。

(5) について

〔硬筆で試し書きをさせる。〕とは、(3)でとりあげたような漢字を書かせ、児童にとって身近な硬筆で、どれだけ「にょう」と「つくり」のバランスを意識して書いているか見る方法である。第2章の方法1、方法6と関連している。試し書き

とまとめ書きを書くスペースを用意したワークシートを使用すると、まとめ書きをしたときの変化が分かりやすい。

単元7「まとめ〈新しい星〉」

【単元目標】

- ・5年生で学習したことをまとめる。
- ・自分のめあてを持って学習する。
- ・自分のめあてに対して、自己評価をする。
- ・相互評価をする。

【授業導入（例）】

- (1) 5年生で学習したことを振り返らせる。
- (2) 「新しい星」には、これまで学習した内容の中の何が生かせるが考えさせる。
- (3) 試し書きをし、友達と相互評価し、自分のめあてを設定させる。

(1) について

〔5年生で学習したことを振り返らせる。〕とは、この単元が5年生最後の単元であることを告げ、一年間の学習内容を振り返る活動である。「既習事項との関連付け」をし、思い出すことで、本時の意欲を高めていきたい。

(2) について

〔「新しい星」には、これまで学習した内容の中の何が生かせるが考えさせる。〕とは、これまで学習した中で書いてきた「笛」「馬車」「すばる」「花さく町」「進め」から、どの学習が生かせるか考える活動である。ここでは、主に「笛」の上下の組み立て方、「馬車」の横画の間隔、「花さく町」の漢字と仮名の大きさを学習したことを活用することができる。まさに、「既習事項との関連付け」をし、学習意欲を高めることができる。

(3) について

〔試し書きをし、友達と相互評価し、自分のめあてを設定させる。〕とは、これまで規準文字を見て課題を設定していた活動から、友達と相互に見合うことで、めあてを設定する方法である。他者との関わりをすることで、学ぶ意欲を高め、5年生のまとめに望むことができる。これは、他者との関わりがあり、「外発的動機付け」ではあるが、友達と関わるのが好きな児童にとって、効果的であろう。

学習意欲を高めるために必要な動機付けは、主に教師側が行う手立てによって、「内発的動機付け」をすることができると考えられる。

また、「目標の明確化」を図るために効果的な

のは、「試し書き」をさせることがわかった。しかし、ワンパターンな「導入」になってしまっただけは、児童の学習意欲の向上は図れない。そこで、ゲーム感覚で楽しみながら授業に入れる「導入」等を考えていくことも大切である。

## おわりに

本研究では、小学校国語科書写において、5年生を例に挙げ、学習意欲を高める「導入」方法について考えてきた。

「学習意欲」や「導入」についての理論をもとに、国語科書写の授業導入を考え、明らかになった要点は以下の10点である。

- ・ 本時の目標を明確にすること。
- ・ 児童の実態を把握すること。
- ・ 既習事項との関連を持たせ、未知と既知を混在させること。
- ・ 比較発見による意欲付けを行うこと。
- ・ 日常生活の中でなじみのあるものを取り上げること。(ノートなど)
- ・ 児童の知的好奇心を高める知識を持っておくこと。
- ・ 具体物(組み立て文字など)を操作することによって、課題を発見すること。
- ・ 試し書きから、課題を発見すること。
- ・ 教室の環境を整えること。
- ・ ゲーム感覚で楽しめる「導入」を用意すること。

本研究で得られた小学校国語科書写5年生での「導入」例について、今後実践し、児童の実態に応じた「導入」のあり方を考察していかねばならない。そして、学習意欲との関連を図りながら、児童の興味関心を高めるためには、どのような書写の「導入」が考えられるのかさらに研究を深めていきたい。

## 参考文献

- ・ 飯島幸久『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要 第32集』「保健体育科 児童の学習意欲を高める授業導入の工夫」1987, P84~89
- ・ 古島稔『道徳指導の技術<上>導入と展開』株式会社帝国地方行政学会, 1973, P167~171
- ・ 東洋・奥田真丈・河野重男『学校教育事典』教育出版, 1993, P128
- ・ 吉本均『現代授業研究大事典』, 明治図書, 1987, P486
- ・ 吉本均『授業の演出と指導案作り』, 明治図書, 2006, P143
- ・ 東洋・中島章夫・梶田叡一『授業改革事典①授業の理論』 第一法規出版株式会社, 1982, P171~P175
- ・ 東洋・中島章夫・梶田叡一『授業改革事典②授業の設計』 第一法規出版株式会社, 1982, P23~51
- ・ 藤原宏『わかりやすい書写の授業—内容と展開と評価—』, 東洋館出版社, 1981, P175
- ・ 波多野誼余夫『自己学習能力を育てる—学校の新しい役割—』, 東京大学出版会, 1980, P34
- ・ 加藤幸次『授業のパターン分析』, 明治図書, 1977, P21
- ・ 輿水実『国語指導法事典』, 明治図書, 1963, P174.175
- ・ 河内義勝『新編 新しい書写』, 東京書籍株式会社, 2005
- ・ 有村久春『悩める教師へのアドバイス』, 教育開発研究所, 2007, P85
- ・ 上條晴夫『教室の空気を変える! 授業導入100のアイデア』たんぽぽ出版, 2006, P110~116
- ・ 山崎英則・片山宗二『教育用語辞典』ミネルヴァ書房, 2003, P262
- ・ 鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師—「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」—』, 教育出版, 2007, P24~32
- ・ 稲垣忠彦・佐藤学『子どもと教育 授業研究入門』, 岩波書店, 1996, P15.16
- ・ 續木湖山『〔新訂〕書写指導のポイント』, 教育出版, 1993, P38
- ・ 伊藤崇達『やる気を育む心理学』2007, P47~50